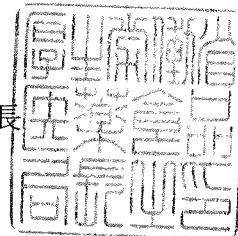


薬食発第 0731012 号
平成 20 年 7 月 31 日

各都道府県知事 殿

厚生労働省医薬食品局長



第十五改正日本薬局方の一部改正について

標記について、平成 20 年 7 月 31 日厚生労働省告示第 417 号をもって、「日本薬局方（平成 18 年厚生労働省告示第 285 号）の一部を改正する件」が別添のとおり告示され、同日適用されることとなったので、下記の事項に御留意の上、関係者に対する周知徹底及び指導に御配慮いただきたい。

記

第 1 第十五改正日本薬局方（以下「薬局方」という。）の一部改正の要点について

1. 医薬品各条の部へパリンナトリウムの条において、純度試験の項を改正し、過硫酸化コンドロイチン硫酸に係る規定を追加したこと。
2. 上記 1. に伴い、一般試験法の部 9. 0 1 標準品の条を改正し、過硫酸化コンドロイチン硫酸標準品を追加したこと。

第 2 適用時期について

本改正告示は、平成 20 年 7 月 31 日より適用すること。





(号外) 独立行政法人国立印刷局

目次

〔政令〕

- 在外公館に勤務する外務公務員の在勤基本手当の額並びに住居手当に係る控除額及び限度額を定める政令(二四〇)
- 農林水産省組織令の一部を改正する政令(二四一)
- 研修員手当の号の適用に関する規則の一部を改正する省令(外務一〇)
- 租税特別措置法施行規則の一部を改正する省令(財務五二)
- 中小企業金融公庫法施行規則の一部を改正する省令(財務・経済産業四)
- 農林水産省組織規則の一部を改正する省令(農林水産五一)
- 農林水産技術会議事務局組織規則の一部を改正する省令(同五二)
- 海上運送法第三十五条の規定に基づく日本船舶・船員確保計画の認定等に関する省令(国土交通六七)
- 船舶職員及び小型船舶操縦者法施行規則の一部を改正する省令(同六八)

〔告示〕

- 関税暫定措置法第八条の四第一項の規定に基づき、特定特恵鉱工業產品等について、輸入額等が限度額等を超えることとなつた特定特恵鉱工業产品等及び月を告示する件

〔財務二三四〕

- 臨床研究に関する倫理指針の全部を改正する件(厚生労働四一五)
- 食品、添加物等の規格基準の一部を改正する件(同四一六)
- 日本薬局方の一部を改正する件(同四一七)
- 日本船舶及び船員の確保に関する基本方針(国土交通九三〇)

○平成二十年度に海上運送法第三十五

条第一項又は第四項の規定による日本船舶・船員確保計画の認定の申請をする場合における同条第三項第五号の日本船舶の隻数の増加の割合を定める省令(同六九)

本号で公布された法令のあらまし

○在外公館に勤務する外務公務員の在勤基本手当の額並びに住居手当に係る控除額及び限度額を改定する政令の一部を改正する政令(政令第二四〇号)(外務省)

1 在インド日本大使館等の在外公館に勤務する外務公務員に支給する在勤基本手当の額を改定することとした。(別表第一関係)、この政令は、平成二〇年八月一日から施行することとした。

8 農村振興局整備部水利整備課を水資源課に改組するとともに、同部に農地資源課及び農村整備官一人を設置し、農地整備課及び地域整備課を廃止するほか、設計課及び防災課の所掌事務を変更することとした。(第八〇条及び第八二条～第八五条関係)

9 この政令は、平成二〇年八月一日から施行することとした。

△農林水産省組織令の一部を改正する政令(政令第二四一号)(農林水産省)

1 農村振興局企画部を農村政策部に改組することとした。(第二条関係)、2 大臣官房企画評価課の所掌事務を変更することともに、同課の名称を「政策課」に改めることとした。(第一五条関係)

3 大臣官房情報課の所掌事務を変更することともに、同課の名称を「情報評価課」に改めることとした。(第四八条関係)

4 消費・安全局農産安全管理課の所掌事務を変更することとした。(第五条関係)、5 生産局に農業生産支援課、技術普及課、知的財産課、生産流通振興課及び農業環境対策課を設置するとともに、同局農産振興課、生産技術課、園芸課、特産振興課及び種苗課を廃止することとした。(第五五条～第五九条関係)

6 経営局普及・女性課の所掌事務を変更するとともに、同課の名称を「人材育成課」に改めることとした。(第六九条関係)

7 農村振興局農村政策部に農村計画課、中山間地域振興課、都市農村交流課及び農村環境課を設置し、農村政策課、資源課、事業計画課及び地域計画官を廃止するとともに、土地改良企画課を同局整備部に移すほか、同局総務課の所掌事務を変更することとした。(第七五条～第七九条及び第八一条関係)

○厚生労働省告示第四百六十六号
食品衛生法（昭和二十二年法律第二百三
の規格基準（昭和三十四年厚生省告示第三
示の公布の日から起算して一年を経過した
いては、なお従前の例によることができる

の規定に基き、食品添加物等の輸入された器具又は容器包装について、告のように改正する。ただし、この告

第3器具及び容器包装の部

「メツキ用スズ」を「食品に接触する部分に使用するメツキ用スズ」と「5%以上」を「0.1%を超えて」に改め、同項3の四中「10%以上」を「0.1%を超えて」と「容器包装」を「容器包装の食品に接触する部分」と改め、同項4の四中「容器包装」を「容器包装の食品に接触する部分」と「20%以上」を「0.2%を超えて」に改め、同項ただし書きを削除。
第3器具及び容器包装の部(試薬・試液等の項4標準溶液、標準原液のカドミウム標準溶液(ガラス等試験用)の項を削除。
第3器具及び容器包装の語の器具類としては容器包装又はいわゆる原材料の材質別規格の項1の四中「試料」のトビ(ただし、ホウロウ引きのものであつて容量が3L以上のものを除く。)を加え、同項2の2のaを次のものに改める。

① 検量線の作成

- 誘導結合プラズマ発光強度測定法により測定し、カドミウム及び銅それぞれの検量線を作成する。

試験溶液について、原子吸光光度法又は誘導結合プラズマ発光強度測定法により、カドミウム及び鉛の溶出量を求めるとき、その量は、次の表の第1欄に掲げる器具又は容器包装の区分に応じ、それぞれカドミウムにあつては同表の第2欄に掲げる量以下、鉛にあつては同表の第3欄に掲げる量以下でなければならない。

第1欄 ガラス製の器具 又は容器包装	第2欄 加熱調理用器具 のもの	第3欄 0.5μg/ml
陶磁器製の器具 又は容器包装	加熱調理用器具以外 のもの	0.05μg/ml
	容量600ml未満のもの	0.5μg/ml
	容量600ml以上3L未 満のもの	0.25μg/ml
	容量3L以上のもの	0.25μg/ml
ホウロウ引きの 器具又は容器包 装	加熱調理用器具であつて容量が3L未満のも の	0.07μg/ml
	加熱調理用器具以外のものであつて容量が3 L未満のもの	0.07μg/ml

○厚生労働省告示第四百十七号
薬事法（昭和三十五年法律第
八年厚生労働省告示第二百八十八

第百四十五号) 第四十一條第一項の規定に基づき、日本薬局方(平成十五号)の一部を次のように改正する。

液体を満たしたときの深さが2.5cm以上のものであつて容量が3L以上のもの	$0.5\mu\text{g}/\text{cm}^3$	$1\mu\text{g}/\text{cm}^3$
---------------------------------------	------------------------------	----------------------------

	第1欄	第2欄	第3欄
ガラス製の器具又は容器包装			
陶磁器製の器具又は容器包装		$0.7\mu\text{g}/\text{cm}^2$	$8\mu\text{g}/\text{cm}^2$
木やロウ引きの器具又は容器包装	液体を漏たすことのできないもの又は液体を漏たしたときにその深さが2.5cm未満のもの	<p>加熱調理用器具 加熱調理用器具以外のもの</p>	<p>$0.7\mu\text{g}/\text{cm}^2$ $8\mu\text{g}/\text{cm}^2$</p>
液体を漏たしたときの容量が3L以上のもの	$0.5\mu\text{g}/\text{cm}^2$	$1\mu\text{g}/\text{cm}^2$	$1\mu\text{g}/\text{cm}^2$

井戸川一十年七月三十一日		厚生労働大臣 姫孫 要
第十五改正日本薬局方一般試験法の部の、〇一標準品の条の項カラジノゲナーザ標準品の項に次の二項を加へる。		
過硫酸化コンドロイチン硫酸標準品	純度試験	
標準十日以上日本薬局方医療品部外の短くぐつハナムラカバの糸織物試験の項の二項を追へる。		
(5) 過硫酸化コンドロイチン硫酸 本品20mgを核磁気共鳴スペクトル測定用3-トリメチルシリルプロピオニ酸ナトリウム- d_6 の核磁気共鳴スペクトル測定用重水溶液(1→1000)0.60mLに溶かし、試料浴液とする。この液につき核磁気共鳴スペクトル測定用3-トリメチルシリルプロピオニ酸ナトリウム- d_6 を内部基準物質として核磁気共鳴スペクトル測定法<2.21>プロトン共鳴周波数400MHz以上の装置)を用いる方法により ¹ Hを測定するとき、δ2.13~2.17ppmに過硫酸化コンドロイチン硫酸のN-アセチル基に由来するシグナルを認めない。		

日曜木日 13月7年20成平

試験条件

温度 : 25°C

スピニング : オフ

データポイント数 : 32,768

スペクトル範囲 : D H O のシグナルを中心に $\pm 6.0 \text{ ppm}$

バルス角 : 90°

繰り返しバルス待ち時間 : 20秒

ダミースキヤン : 4回

積算回数 : ヘリウムの N-Aセチル基のプロトンのシグナルの S/N 比が 200 以上得られる回数

ウインドウ関数 : 指数関数 (Line broadening factor = 0.2 Hz)

システム適合性

過硫酸化コンドロイチン硫酸標準品 0.10mg を核磁気共鳴スペクトル測定用重水溶液 (1 → 1000) 0.60 mL に溶かし、標準溶液とする。標準溶液 0.60 mL にヘリウム約 20mg を溶かし、シリルプロピオニ酸ナトリウム → d 的核磁気共鳴スペクトル測定用重水溶液 (1 → 1000) 0.60 mL に溶かし、標準溶液とする。この液につき、上記の条件で操作するとき、δ 2.02 → 2.06 ppm にヘリウムの N-Aセチル基に由来するシグナル、及び δ 2.13 → 2.17 ppm に過硫酸化コンドロイチン硫酸の N-Aセチル基に由来するシグナルを認める。

○ 国土交通省令第 10 号

海上運送に関する基本方針を次のとおり定めたので、同令第 1 項の規定による公報である。
平成 11 年 4 月 11 日

国土交通省令 第 10 号

安定的な海上輸送の確保を図るために必要な日本船舶の確保、これに乗り組む船員の育成及び確保その他これらに関連する措置（以下「日本船舶及び船員の確保」という。）に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るため、海上運送法（昭和 24 年法律第 187 号。以下「法」という。）第 34 条第 1 項に基づき、国土交通大臣は、基本方針を定める。

1. 日本船舶及び船員の確保の意義及び目標に関する事項

(1) 日本船舶及び船員の確保の意義

日本船舶及び船員の確保に関する基本方針

海上運送に関する基本方針を次のとおり定めたので、同令第 1 項の規定による公報である。
平成 11 年 4 月 11 日

日本船舶及び船員の確保に関する基本方針

その他の他これらに関連する措置（以下「日本船舶及び船員の確保」という。）に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るため、海上運送法（昭和 24 年法律第 187 号。以下「法」という。）第 34 条第 1 項に基づき、国土交通大臣は、基本方針を定める。

(2) 日本船舶及び船員の確保の目標

- ① 安定的な国際海上輸送を確保するためには、平成 19 年 12 月の交通政策審議会答申において、外航日本船舶及び外航日本人船員の必要規模を試算したところ、外航日本船舶は約 450 隻、外航日本人船員は約 5,500 人とされた。一方、外航日本船舶及び外航日本人船員の現状規模を踏まえれば、これらの必要規模を短期間で達成することは困難であることから、当面の取組みとして、外航日本船舶の隻数を平成 20 年度から 5 年間で 2 倍に、外航日本人船員の人数を 10 年間で 1.5 倍に増加させることを目標とする。

- ② 安定的な国内海上輸送を確保するためには、平成 19 年 12 月の交通政策審議会答申において、内航船員の将来見通しを試算したところ、5 年後に約 900 人、10 年後には約 4,500 人程度の船員不足が生じる可能性があるとされた。このため、5 年後、10 年後にこれらの船員不足が生ずることのないよう内航船員の育成及び確保を図ることを目標とする。

2. 日本船舶及び船員の確保のための政府が実施すべき施策に関する基本的な方針

我が国の海運の置かれた状況にかんがみると、海洋基本法の施行も受け、外航海運においては外航日本船舶の確保並びに外航日本人船員の育成及び確保が、内航海運においては内航船員の育成及び確保が必要であり、以下のとおり、これらに対処するための施策を実施する必要がある。

(1) 日本船舶・船員確保計画認定制度の適切な実施

今般、法において、船舶運航事業者等が基本方針に則して日本船舶・船員確保計画（以下、「計画」という。）を作成し、国土交通大臣の認定を申請することができる」とし、当該認定を受けた対外船舶運航事業者に対するトン数標準制の適用等の支援措置を設けたが、同認定制度の適切な実施を確保することにより、日本船舶及び船員の確保を図ることが必要である。

このため、計画の認定に当たっては、本基本方針に従って日本船舶及び船員の確保が図られる計画である旨を審査するとともに、認定計画に従った措置の実施状況について的確に把握し、必要な措置を講じていない場合には勧告や認定の取消しを行うこと等により、認定制度の適切な実施を確保する。

しかししながら、世界単一市場たる外航海運分野における国際競争が激化する中、我が国外航海運においては、円高等によるコスト競争力の喪失から、安定的な国際海上輸送の核となるべき外航日本船舶は、最も多かった昭和 47 年の 1,530 隻から平成 18 年には約 2600 隻へと極端に減少しており、極めて憂慮すべき事態となっている。

このため、国際競争条件の均衡化に加え、外航日本船舶及び外航日本人船員の計画的増加について外航海運事業者の自発的な取組みを促すための環境を整備し、外航日本船舶の確保並びに外航日本人船員の育成及び確保を図ることにより、安定的な国際海上輸送を確保することは、大きな意義がある。